

大鹿村中央構造線博物館たより

195号



2025年8月発行

TEL: (0265) 39-2205
staff69@mtl-muse.com

南アルプスが急速隆起し始めた頃の礫層を見学^{れきそう}

南アルプスは、200～300万年前頃はまだ低標高・低起伏で、100万年前頃から急速に隆起して3,000m級の山脈となったと考えられています(*1)。その根拠の一つが、南アルプス南方の静岡県御前崎～掛川周辺に堆積した地層の変化です。300～200万年前に堆積した地層(掛川層群)は主に砂や泥の堆積物からなるのに対し、100万年前頃から堆積した地層(小笠層群)は厚い礫層をいくつも含みます。これは、南アルプスの隆起によって天竜川と大井川が大量の礫を運ぶようになったためと考えられているのです(*2)。

6月下旬に静岡に行く機会がありましたので、帰りがけに、南アルプスの急速な隆起が始まった頃に堆積した礫層を探して、掛川市の小笠神社駐車場～小笠山(標高264m)間を歩いてみました。すると、早速、小笠神社駐車場の脇に礫層の露頭が見つかりました(写真1)。砂岩が多いように見えたが、泥岩や赤色チャートも見つかりました(写真2)。これらの礫が南アルプスから流れてきたのは間違いなさそうです。今回歩いた区間は、ずっと礫層が続いていましたが、その供給源は大井川水系の河川と考えられているようです(*3)。(宮崎)



写真1 小笠神社駐車場脇の礫層

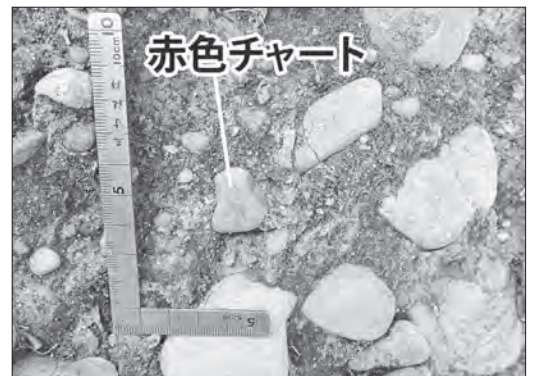


写真2 礫層中に赤色チャートが見つかった！

- 参考文献** (*1)南アルプス世界自然遺産登録推進協議会(2010) 南アルプス学術総論, 144p.
https://www.minami-alps-br.org/img/data_center/data/10_2_MAgakujyutsu.pdf
(*2)柴正博(2017)駿河湾の形成 島弧の大規模隆起と海水準上昇, 東海大学出版部, 406p.
(*3)柴ほか(2024)静岡県西部の更新統,小笠層群の層序・年代と堆積過程, 地球科学, 78-4, p.159-178.